

埼玉医科大学リハビリテーション科専門研修プログラム

目次

1. 埼玉医科大学リハビリテーション科専門研修プログラムについて
2. リハビリテーション科専門研修はどのようにおこなわれるのか
3. 専攻医の到達目標（修得すべき知識・技能・態度など）
4. 各種カンファレンスなどによる知識・技能の習得
5. 学問的姿勢について
6. 医師に必要なコアコンピテンシー、倫理性、社会性などについて
7. 施設群による研修プログラムおよび地域医療についての考え方
8. 年次毎の研修計画
9. 専門研修の評価について
10. 専門研修管理委員会について
11. 専攻医の就業環境について
12. 専門研修プログラムの改善方法
13. 修了判定について
14. 専攻医が研修プログラムの修了に向けて行うべきこと
15. 研修プログラムの施設群
16. Subspecialty 領域との連続性について
17. 専攻医の受け入れ数について
18. リハビリテーション科研修の休止・中断、プログラム移動、
プログラム外研修の
条件
19. 専門研修プログラム管理委員会
20. 専門研修指導医
21. 専門研修実績記録システム、マニュアル等について

22. 研修に対するサイトビジット（訪問調査）について

23. 専攻医の採用と修了

1. 埼玉医科大学リハビリテーション科専門研修プログラムについて

リハビリテーション科専門研修プログラム（以下 PG）は、2017 年度から始まる新専門医制度のもとで、リハビリテーション科専門医になるために、編纂された研修プログラムです。日本専門医機構の指導の下、日本リハビリテーション医学会が中心となり、リハビリテーション科専門研修カリキュラム（別添資料参照：以下、研修カリキュラムと略す）が策定され、さまざまな病院群で個別の専門研修プログラムが作られています。

周知のごとく、我が国では **2025 年に向けて** 後期高齢者が増加の一途をたどっていますが、**その高齢化率、実は埼玉県が日本一** なのです。ということは、脳卒中、心筋梗塞、大腿骨頸部骨折、慢性閉塞性肺疾患などのリハビリテーションが必要

不可欠とされる多くの疾患が増えるということです。このような医療状況の中で、今後の医療の方向性を示すキーワードは「**地域包括ケアシステム**」です。これは、

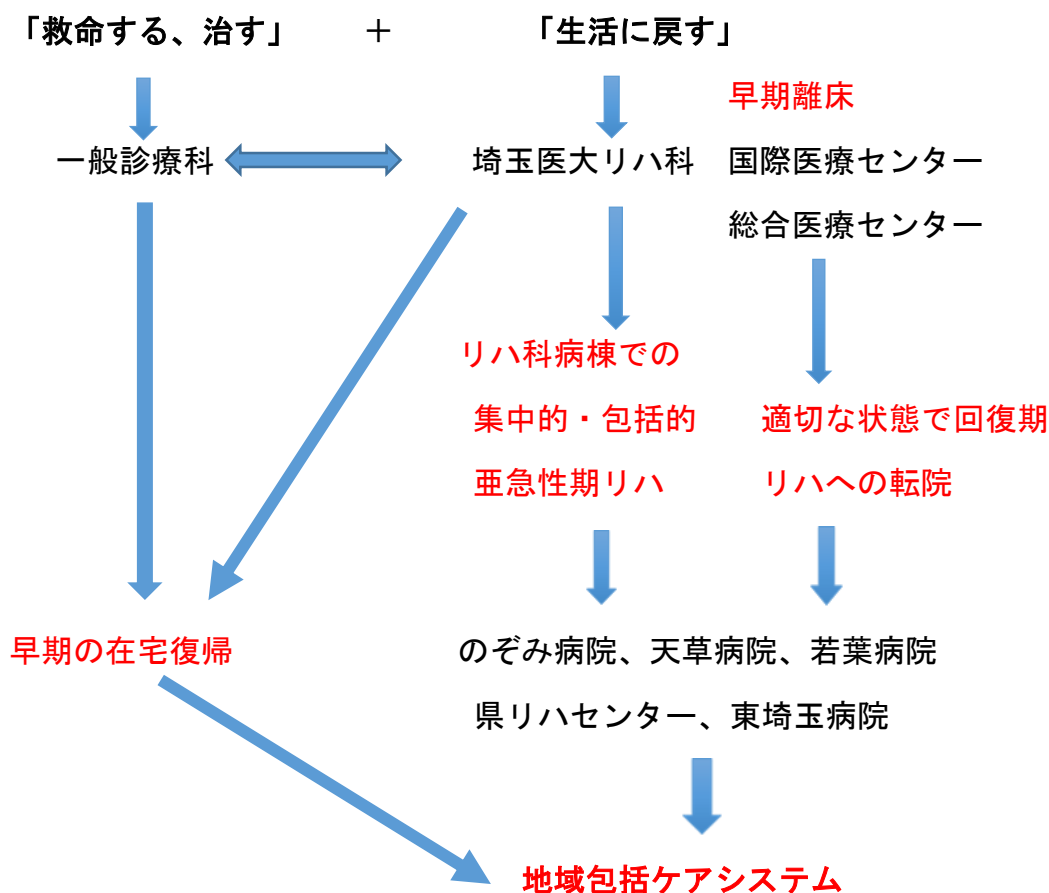
「重度な要介護状態となっても住み慣れた地域で自分らしい暮らしを人生の最後まで続けることができるよう、住まい・医療・介護・予防・生活支援が一体的に提供されるシステム」です。**これからのリハビリテーション科専門医は、急性期、亜急性期、回復期、維持期のいずれにおいても、患者さんをこのシステムが十分な力を発揮できるような状態にすることを念頭に診療を行うことが要求されます。**埼玉医科大学リハビリテーション科専門研修プログラムでは、大学病院に独立した病棟を有する埼玉医科大学病院リハビリテーション科での研修を中心とし、埼玉県下での多様なリハビリテーション医療施設において、リハビリテーション科専門医になるために必要なすべての領域にわたる症例の経験ができると同時に、上に述べたように「**地域包括ケアシステム**」を視野に入れたリハビリテーションの流れが**研修できません**（下図）。

「地域包括ケアシステム」を視野に入れた医療とは、従来行われてきた「**救命する、治す**」医療に加えて「**生活にもどす**」医療を並行して行うもので、前者を一般診療科が行い、リハビリテーション科は後者を担います。この「**役割分担**」と「**連携**」は急性期だからこそ必要

な視点となります。すなわち、急性期でのリハビリテーション科の役割は、「生活に戻す」ことを阻害する「廃用症候群」の発生を予防することで、そのために行われるのが「早期離床」です。この早期離床が安全に行われるために必要なことは、「救命する、治す」医療を行っている一般診療科との連携（横の連携）です。同時に、急性期リハビリテーションから在宅復帰が可能か、または亜急性期～回復期リハビリテーションに移行すべきかの判断もリハビリテーション科専門医の重要な役割となります。特に回復期リハビリテーションへの移行に際しては、そこでの機能が最大限に発揮できる状態にして移行できるようにすることが課せられます（縦の連携）急性期を脱すると、「救命する、治す」医療はその役割を一旦終え、亜急性期～回復期をリハビリテーション科専門医が中心となって、「生活に戻す」医療を展開していきます。この時期にリハビリテーション科専門医にとって重要なことが2つあります。1つは、患者さんを地域包括ケアシステムに組み込むためには、福祉サイドとの「横の連携」、特に介護保険でのサービス体制を形作っていくケアマネージャーとの連携が必要不可欠となります。他の1つですが、この時期に主体的な役割を果たすリハビリテーション医学は、「生活に戻す」ために「生活の障害」を中心に見ていきますが、その「生活の障害」を起こす多様な原因疾患の管理と付随して生じる合併症の予防・治療がリハビリテーション科専門医の役割として課せられます。その点からは、リハビリテーション科専門医は、亜急性期以降での「総合診療医」でなければなりません。そして、その役割を果たすためには自らの臨床能力を高めることと同時に、他の専門領域科との連携（横の連携）が必要不可欠となります。

このようにして、リハビリテーション科専門医は、他の診療科、回復期リハビリテーション病院、福祉関連職種などとの縦横の連携を駆使して、患者さんを包括ケアシステムがその機能を果たせる状態にして、地域に戻すことが重要な役割となります。本プログラムでは、このようなダイナミックなリハビリテーション科専門医を養成するプログラムを用意していますので、その特徴を以下に述べていきます。

【地域包括ケアを視野に入れた本プログラムの概略図と各施設の役割】



- 1) 急性期リハビリテーションの研修は、埼玉医大病院群（埼玉医大リハ科、国際医療センターリハ科、総合医療センターリハ科）で行われます。この中でも、国際医療センターは救命救急センター、心臓センター、がんセンターから成り、脳卒中、心臓病の急性期リハとがんのリハを集中的に研修できますが、特に**心臓リハは我が国では屈指のレベル**を誇っています。
- 2) 本プログラムでの、**他にはない特徴は、特定機能病院である埼玉医大病院の中に、リハビリテーション科が25床の独立した病棟（一般病棟）を有し、急性期を脱した患者さんに対する集中的・包括的亜急性期リハを展開し、早期の在宅復帰を目指していると同時に、在宅復帰に時間を要する患者さんの場合には、その後の回復期リハ病棟の機能が最大限に発揮できるような状態にして回復期リハ病棟への転院を図っていることです。**

- 3) 総合医療センターでは**周産期センター**を有していることが大きな特徴で **NICU から重度障害児施設までのリハシステム**を研修可能です。
- 4) 本プログラムでは、回復期リハ病棟を有する5施設でのプログラムが用意されています。**希望病院、天草病院は本県での回復期リハ病棟の草分け**であり、ともに地域包括ケアへ向けてのシステムを研修可能です。**埼玉県総合リハセンターでは、脊髄損傷に対するリハを集中的に研修**します。また、本センターでは**職業復帰支援事業を展開**しており、障害者の社会復帰の過程も研修可能です。**東埼玉病院では、他のプログラムではまれな神経・筋疾患のリハが研修可能**です。
- 5) 上記には示されていない当プログラムでのもう一つの特徴としては、**肢体不自由施設である光の家療育センター**で、おそらく全国でも数少ない、**こどものリハビリテーションを集中的に研修が可能**な点であります。

埼玉医科大学リハビリテーション科専門研修 PG の目的と使命は以下の4点にまとめられます。

- 1) 専攻医が医師として必要とされる基本的診療能力（コアコンピテンシー）を習得すること
- 2) 専攻医がリハビリテーション科領域の専門的診療能力を習得すること
- 3) 上記に関する知識・技能・態度と高い倫理性を備えることにより、標準的な医療を提供できること、それによって患者さんとその家族に信頼されること、
プロフェッショナルとしての誇りを持ち、患者さんへの責任を果たせる
リハビリテーション科専門医となること
- 4) リハビリテーション科専門医の育成を通して、国民の健康・福祉に貢献すること

埼玉医科大学リハビリテーション科研修 PG においては指導医が皆さんの教育・指導にあたりますが、皆さんも主体的に学ぶ姿勢をもつことが大切です。リハビリテーション科専門医は自己研鑽し自己の技量を高めると共に、積極的に臨床研究等に関わりリハビリテーション医療の向上に貢献することも期待されます。

リハビリテーション科専門医はメディカルスタッフの意見を尊重し、患者さんから信頼され、患者さんを生涯にわたってサポートし、地域医療を守る医師です。本研修 PG での研修後に皆さんは標準的な医療を安全に提供し、疾病の予防に努めるとともに将来の医療の発展に貢献できるリハビリテーション科専門医となります。

埼玉医科大学リハビリテーション科研修 PG は、日本専門医機構のリハビリテーション科研修委員会が提唱する、国民が受けることのできるリハビリテーション医療を向上させ、さらに障害者を取り巻く福祉分野にても社会に貢献するためのプログラム制度に準拠しており、本プログラム修了にてリハビリテーション科専門医認定を申請するための資格の基準を満たします。

埼玉医科大学リハビリテーション科専門研修 PG では、

- (1) 脳血管障害、外傷性脳損傷など
- (2) 外傷性脊髄損傷、
- (3) 運動器疾患、外傷
- (4) 小児疾患
- (5) 神経筋疾患
- (6) 切断
- (7) 内部障害
- (8) その他(廃用症候群、がん、疼痛性疾患など)

の 8 領域にわたり研修を行います。これらの分野で、他の専門領域の医療スタッフと適切に連携し、リハビリテーションのチームリーダーとして主導して行く役割を担えるようになります。

本研修 PG は基幹施設と連携施設の病院群で行われます。研修 PG 修了後には、大学院への進学や subspecialty 領域専門医の研修を開始する準備も整えられるように研修を行います。研修の一部に臨床系大学院を組み入れるコースも検討します。

2. リハビリテーション科専門研修はどのようにおこなわれるのか

1) **研修段階の定義**：リハビリテーション科専門医は初期臨床研修の2年間と専門研修（後期研修）の3年間の合計5年間の研修で育成されます。

✓**初期臨床研修2年間に**、自由選択期間でリハビリテーション科を選択することもあるでしょうが、この期間をもって全体での5年間の研修期間を短縮することはできません。また、初期臨床研修にてリハビリテーション科の研修が、専門研修（後期研修）を受けるにあたり、必修になることはありません。初期臨床研修が修了していない場合、たとえ2年間を経過していても、専門研修を受けることはできません。また、保険医を所持していないと、専門研修を受けることは困難です。

✓**専門研修の3年間の1年目、2年目、3年目には**、それぞれ医師に求められる基本的診療能力・態度（コアコンピテンシー）と日本リハビリテーション医学会が定める研修カリキュラムにもとづいてリハビリテーション科専門医に求められる知識・技術の修得目標を設定し、その年度の終わりに達成度を評価して、基本から応用へ、さらに専門医として独立して実践できるまで着実に実力をつけていくように配慮します。研修施設により専門性があるため、症例等にばらつきがでます。このため、修得目標はあくまでも目安であり、3年間で習得できるよう、個別のプログラムに応じて習得できるように指導を進めていきます。

✓**埼玉医科大学リハビリテーション科専門研修PGの修了判定には以下の経験症例数が必要です**。日本リハビリテーション医学会専門医制度が定める研修カリキュラムに示されている研修目標および経験すべき症例数を以下に示します。

1) 脳血管障害・外傷性脳損傷など：15例

（脳血管障害13例、外傷性脳損傷2例）

2) 外傷性脊髄損傷：3例

（ただし、脊髄梗塞、脊髄梗塞、脊髄腫瘍、転移性脊髄脊椎腫瘍、など外傷性脊髄損傷と同様な症状を示す疾患をふくめてもよい）

3) 運動器疾患・外傷：22例

（関節リウマチ2例以上、肩関節周囲炎、肩腱板断裂など、の肩関節疾患2例以上、変形性関節症（下肢）2例以上、変形性関節症、（下肢）

- 2例以上、骨折2例以上、骨粗鬆症1例以上、)
- 4) 小児疾患：5例、(脳性麻痺2例以上)
 - 5) 神経筋疾患：10例、(パーキンソン病2例以上)
 - 6) 切断：3例、
 - 7) 内部障害：10例
(呼吸器疾患2例異常、心・大血管疾患2例以上、末梢血管障害1例以上、その他内部障害2例以上)
 - 8) その他(廃用症候群、がん、疼痛性疾患など)：7例、
以上の75例を含む100例以上を経験する必要があります。

2) 年次毎の専門研修計画

専攻医の研修は毎年の達成目標と達成度を評価しながら進められます。以下に年次毎の研修内容・習得目標の目安を示します。

専門研修1年目(SR1)では、基本的診療能力およびリハビリテーション科基本的知識と技能の習得を目標とします。基本的診療能力(コアコンピテンシー)では指導医の助言・指導のもと、別記の事項が実践できることが必要となります。また、基本的知識と技能は、研修カリキュラムでAに分類されている評価・検査・治療の概略を理解し、一部を実践できることが目標となります。初年度の研修先病院は、専攻医の強い希望がない限りは、基幹研修施設である埼玉医科大学病院リハビリテーション科ですから、リハビリテーション分野の幅広い知識・技術が習得可能です。指導医の手厚い病院ですので、しっかりと基本的診療能力を磨き、専攻医としての態度をレベルアップすることが必要となります。指導医は日々の臨床を通して専攻医の知識・技能の習得を指導します。専攻医は、院内での研修だけでなく、院外活動として、学会・研究会への参加、などを通して自らも専門知識・技能の習得を図ります。図1に習得目標を示してあります。詳細は研修カリキュラムを読んでください。

図1 専門研修1年目（SR1）習得目標

専門研修1年目（SR1）

基本的診療能力（コアコンピテンシー）

指導医の助言・指導のもと、別記の事項が実践できる

【別記】基本的診療能力（コアコンピテンシー）として必要な事項

- 1) 患者や医療関係者とのコミュニケーション能力を備える
- 2) 医師としての責務を自律的に果たし信頼されること（プロフェッショナリズム）
- 3) 診療記録の適確な記載ができること
- 4) 患者中心の医療を実践し、医の倫理・医療安全に配慮すること
- 5) 臨床の現場から学ぶ技能と態度を修得すること
- 6) チーム医療の一員として行動すること
- 7) 後輩医師に教育・指導を行うこと 基本的知識と技能

知識：運動学、障害学、ADL/IADL、ICF（国際生活機能分類）など 技能：
全身管理、リハビリ処方、装具処方、など

上記の評価・検査・治療の概略を理解し、一部を実践できる。
詳細は研修カリキュラムを参照下さい。

専門研修2年目（SR2）では、基本的診療能力の向上に加えて、診療スタッフへの指導にも参画します。リハビリテーション科基本的知識・技能を幅広い経験として増やすことを目標としてください。特に1年目の埼玉医科大学病院で経験できなかった技能や疾患群については積極的に治療に参加し経験を積んでください。指導医は日々の臨床を通して専攻医の知識・技能の習得を指導します。専攻医は学会・研究会への参加は、ただ聴講するだけでなく質問などの発言や発表できるよう心がけ、関連分野においては実践病態別リハビリテーション研修会 DVD などを通して自らも専門知識・技能の習得を図ってください。図2に習得目標の概略を示してあります。詳細は研修カリキュラムを読んでください。

図2 専門研修2年目（SR2）習得目標

<p>専門研修2年目（SR2）</p> <p>基本的診療能力（コアコンピテンシー）</p> <p>指導医の監視のもと、別記の事項が効率的かつ思慮深くできる</p> <p>【別記】基本的診療能力（コアコンピテンシー）として必要な事項</p> <ol style="list-style-type: none"> 1) 患者や医療関係者とのコミュニケーション能力を備える 2) 医師としての責務を自律的に果たし信頼されること（プロフェッショナルリズム） 3) 診療記録の適確な記載ができること 4) 患者中心の医療を実践し、医の倫理・医療安全に配慮すること 5) 臨床の現場から学ぶ技能と態度を修得すること 6) チーム医療の一員として行動すること 7) 後輩医師に教育・指導を行うこと <p>基本的知識と技能</p> <p>知識：障害受容、社会制度など</p> <p>技能：高次脳機能検査、装具処方、ブロック療法、急変対応など</p> <p>指導医の監視のもと、研修カリキュラムでAに分類されている評価・検査・治療の大部分を実践でき、Bに分類されているものの一部について適切に判断し専門診療科と連携できる</p> <p style="text-align: right;">詳細は研修カリキュラムを参照</p>

専門研修3年目（SR3）では、カンファレンスなどでの意見の集約・治療方針の決定など、チーム医療においてリーダーシップを発揮し、患者さんから信頼さ

れる医療を実践できる姿勢・態度を習得してください。またリハビリテーション分野の中で 8 領域の全ての疾患を経験できているかを意識して、実践的知識・技能の習得に当たってください。指導医は日々の臨床を通して専攻医の知識・技能習得を指導します。専攻医は学会での発表、研究会への参加、DVD などを通して自らも専門知識・技能の習得を図ってください。

図3 専門研修3年目（SR3）習得目標

専門研修 3 年目 (SR3)

基本的診療能力 (コアコンピテンシー)

指導医の監視なしでも、別記の事項が迅速かつ状況に応じた対応ができる

【別記】基本的診療能力 (コアコンピテンシー) として必要な事項

- 1) 患者や医療関係者とのコミュニケーション能力を備える
- 2) 医師としての責務を自律的に果たし信頼されること (プロフェッショナリズム)
- 3) 診療記録の適確な記載ができること
- 4) 患者中心の医療を実践し、医の倫理・医療安全に配慮すること
- 5) 臨床の現場から学ぶ技能と態度を修得すること
- 6) チーム医療の一員として行動すること
- 7) 後輩医師に教育・指導を行うこと

基本的知識と技能

知識 社会制度、地域連携など

技能：住宅改修提案、ブロック療法、チームアプローチなど

指導医の監視なしでも、研修カリキュラムで A に分類されている評価・検査・治療について中心的な役割を果たし、B に分類されているものを適切に判断し専門診療科と連携でき、C に分類されているものの概略を理解し経験している
詳細は研修カリキュラムを参照

3) 研修の週間計画および年間計画

基幹施設（埼玉医科大学リハビリテーション科）

	月	火	水	木	金	土	日
0830-9:00 病棟カンファレンス							
9:00-12:00 13:00-17:30 病棟業務、外来診察							
09:00-10:00 ボトックス外来							
11:00-12:00 嚥下造影検査							
9:00-12:00 嚥下造影検査							
13:00-13:30 がんリハ・カンファレンス							
13:30-14:30 新入院患者カンファレンス							
14:30-16:00 病棟回診							
14:30-16:00 装具診							
16:30-17:30 義足診 17:00-1730 がんリハ・カンファレンス							
18:00-20:00 抄読会、医局会							
18:00-19:00 病棟回診							
18:00-19:00 リハ科全体勉強会（1/月）							

埼玉県総合リハセンター一週間スケジュール

	月	火	水	木	金	土
8:30-9:00 整形外科病棟回診						
8:40-9:00 症例カンファレンス						
8:30-12:00 病棟業務						
9:00-12:00 リハビリ外来,ボトックス注						
9:00-12:00 装具外来						
9:00-12:00 更生相談						
13:00-17:00 リハビリ外来、ボトックス注						
13:15-17:15 病棟業務						
14:00-16:00 VE、VF検査						
16:45-17:15 嚥下カンファレンス						
16:30-17:30 神経内科、リハ科合同カンファ						
16:30-17:30 神経内科、リハ科合同回診						
16:40-17:30 整形外科カンファレンス						
16:45-17:30 NST回診						
16:50-17:30 褥瘡回診						

埼玉医大国際医療センタープログラム

	月	火	水	木	金	土
8:30-9:00 整形外科病棟回診						
8:40-9:00 症例カンファレンス						
8:30-12:00 病棟業務						
9:00-12:00 リハビリ外来,ボトックス注						
9:00-12:00 装具外来						

9:00-12:00	更生相談								
13:00-17:00	リハビリ外来、ボトックス注								
13:15-17:15	病棟業務								
14:00-16:00	VE、VF検査								
16:45-17:15	嚥下カンファレンス								
16:30-17:30	神経内科、リハ科合同カンファ								
16:30-17:30	神経内科、リハ科合同回診								
16:40-17:30	整形外科カンファレンス								
16:45-17:30	NST回診								
16:50-17:30	褥瘡回診								

埼玉医大総合医療センター週間スケジュール

	月	火	水	木	金	土
9:00-12:00	外来・病棟業務					
9:00-12:00	装具診					
9:00-12:00	身障診断書作成					
13:00-17:00	外来・病棟業務					
13:00-17:00	VE検査					
13:00-17:00	ボトックス外来					
13:00-17:00	義足診					
17:00-	リハカンファレンス					
17:00-	全体勉強会					
17:00-	抄読会					

希望病院週間スケジュール

時間	項目	月	火	水	木	金	土
8:30~9:00	病棟回診						
17:00~18:00	症例カンファレンス						
9:00~12:00	病棟業務						
9:00~12:00	外来リハビリ						
16:00~17:00	装具診						
12:30~13:30	VF検査						
14:00~17:00	病棟業務						

東埼玉病院週間スケジュール

時間	内容	月	火	水	木	金
8:30-9:00	嚥下カンファ ア					
14:00-15:00 (第2・第 4のみ)	筋電図					
8:30-10:00	カンファ・回診					
8:30-9:00	内科合同カンファ					
15:00-17:00	装具診					
13:00-14:30	嚥下造影検 査					

天草病院週間スケジュール

		月	火	水	木	金	土
8:30-9:00	病棟申し送り						
9:00-12:00	外来						
9:00-12:00	病棟業務						
10:00-11:00	ボトックス注						
13:00-17:30	病棟業務						
13:00-15:00	装具検討会						
14:00-15:00	高次脳・嚥下外来						
15:00-16:00	VE、VF検査						
16:00-16:30	嚥下カンファレンス						

17:00-17:15 新規入院患者カンファレンス						
---------------------------	--	--	--	--	--	--

若葉病院週間スケジュール

	月	火	水	木	金	土
9:00-9:30 回復期病棟回診						
13:30-14:30 整形外科回診						
13:00-13:30 症例カンファレンス(ランチョン)						
13:00-13:30 ベッドコントロール会議						
8:30-12:00 病棟業務						
15:00-17:30 リハビリ外来,ボトックス注						
13:30-17:30 装具外来						
15:30-17:30 リハビリ外来、ボトックス注						
13:30-17:30 病棟業務						
12:00-12:30 VE、VF検査						
13:30-14:00 嚥下・栄養カンファレンス						
12:00-12:30 回復期病棟会議						
13:30-14:30 リハカンファレンス						
14:00-14:30 褥瘡回診						
13:30-17:30 専門医勉強会						* 1
16:30-18:30 他科交流(国際医療救急科回診)			* 2			
19:00-21:00 他大学交流(防衛医大リハ科勉強会)					* 3	

光の家療育センター週間プログラム

	月	火	水	木	金	土
8:30-12:00 病棟業務						
8:30-12:00 リハビリ外来,						
13:00-17:30 装具外来						

13:00-17:30	症例カンファレンス						
-------------	-----------	--	--	--	--	--	--

埼玉医科大学病院リハビリテーション科研修 PG に関連した全体行事の年度スケジュール

月	全体行事予定
4	<ul style="list-style-type: none"> ▪ SR1: 研修開始。研修医および指導医に提出用資料の配布（埼玉医科大学病院ホームページ） ▪ 指導医・指導責任者：前年度の指導実績報告用紙の提出 ▪ SR3 修了者：専門医認定一次審査書類を日本専門医機構リハビリテーション科研修委員会へ提出 ▪ 研修 PG 管理委員会開催
6	<ul style="list-style-type: none"> ▪ 日本リハビリテーション医学会学術集会参加（発表）（開催時期は要確認） ▪ 埼玉医科大学病院リハビリテーション科研修 PG 参加病院による勉強会（症例検討・予演会 1/3M）
7	<ul style="list-style-type: none"> ▪ SR3 修了者：専門医認定二次審査（筆記試験、面接試験） ▪ 埼玉県リハビリテーション医学会学術集会参加
9	<ul style="list-style-type: none"> ▪ 埼玉医科大学病院リハビリテーション科研修 PG 参加病院による勉強会（症例検討・予演会 1/3M） ▪ 日本リハビリテーション医学会関東地方会参加（発表）
10	<ul style="list-style-type: none"> ▪ SR1、SR2、SR3：指導医による形成的評価とフィードバック（半年ごと） ▪ 次年度専攻医募集開始（埼玉医科大学病院ホームページ） ▪ 日本リハビリテーション医学会秋季学術集会（発表）
11	<ul style="list-style-type: none"> ▪ SR1、SR2：次年度研修希望施設アンケートの提出（研修 PG 管理委員会宛） ▪ 次年度専攻医内定

1 2	<ul style="list-style-type: none"> ▪ 日本リハビリテーション医学会学術集会演題公募（12～1月） （詳細は要確認） ▪ 埼玉医科大学病院リハビリテーション科研修 PG 参加病院による勉強会 （症例検討・予演会 1/3M） ▪ 埼玉県リハビリテーション医学会学術集会参加
2	<ul style="list-style-type: none"> ▪ 埼玉医科大学病院リハビリテーション科研修 PG 参加病院による勉強会 （予演会） ▪ 埼玉県医学会総会参加（発表）
3	<ul style="list-style-type: none"> ▪ その年度の研修終了 ▪ 研修 PG プログラム連携委員会開催（研修施設の上級医・専門医・専門研修指導医・多職種の評価を総括） ▪ SR1、SR2、SR3：研修目標達成度評価報告用紙と経験症例数報告用紙の作成 （年次報告） ▪ SR1、SR2、SR3：研修 PG 評価報告用紙の作成 ▪ 指導医・指導責任者：指導実績報告用紙の作成 （書類は SR1、SR2 分は翌月に提出、SR3 分は当月中に提出） ▪ 研修 PG 管理委員会開催（SR3 研修終了の判定） ▪ 埼玉医科大学病院研修 PG 参加病院による勉強会（症例検討・予演会 研修発表会を兼ねる、1/3M） ▪ 日本リハビリテーション医学会関東地方会参加（発表）

3. 専攻医の到達目標（修得すべき知識・技能・態度など）

1) 専門知識

知識として求められるものには、リハビリテーション概論、機能解剖・生理学、運動学、障害学、リハビリテーション関連領域疾患の知識などがあります。それぞれの領域の項目に、A. 正確に人に説明できる必要がある事項から C. 概略を理解している必要がある事項に分かれています。詳細は研修カリキュラムを参照してください。

2) 専門技能（診察、検査、診断、処置、手術など）

専門技能として求められるものは、(1) 脳血管障害、外傷性脳損傷など (2) 外傷性脊髄損傷 (3) 運動器疾患、外傷 (4) 小児疾患 (5) 神経筋疾患 (6) 切断 (7) 内部障害 (8) その他(廃用症候群、がん、疼痛性疾患など) の 8 領域に亘ります。それぞれの領域の項目に、A: 自分一人のできる／中心的な役割を果たすことができる必要がある事項から、C: 概略を理解している、経験している必要がある事項に分かれています。詳細は研修カリキュラムを参照してください。

3) 経験すべき疾患・病態 研修カリキュラム参照

4) 経験すべき診察・検査等 研修カリキュラム参照

5) 経験すべき手術・処置等 研修カリキュラム参照

6) 習得すべき&態度基本的診療能力（コアコンピテンシー）に関することで、

本プログラムの

2. リハビリテーション科専門研修はどのようにおこなわれるのか

2) 年次毎の専門研修計画 (P4-) および、

6. 医師に必要なコアコンピテンシー、倫理性、社会性などについて (P12-) の項目を参照ください。

7) 地域医療の経験

7. 施設群による研修 PG および地域医療についての考え方 (P13-) の項を参考にしてください。

埼玉医科大学リハビリテーション科専門研修 PG では、基幹施設と連携施設それぞれの特徴を生かした症例や技能を広く、専門的に学ぶことが出来ます

4. 各種カンファレンスなどによる知識・技能の習得

- ・ カンファレンスは、チーム医療を基本とするリハビリテーション領域では、研修に関わる重要項目として位置づけられます。情報の共有と治療方針の決定に多職種がかかわるため、カンファレンスの運営能力は、基本的診療能力だけでなくリハビリテーション医に特に必要とされる資質となります。
- ・ 基幹施設および連携施設それぞれにおいて医師および看護師・リハビリテーションスタッフによる症例カンファレンスで、専攻医は積極的に意見を述べ、医療スタッフからの意見を聴き、ディスカッションを行うことにより、具体的な障害状況の把握、リハビリテーションゴールの設定、退院に向けた準備などの方策を学びます。
- ・ 基幹施設と連携施設による症例検討会：稀な症例や多方面からの検討を要する症例などについては3か月に1回、大学内の施設を用いて検討を行います。学会・地方会などに向けた予演会や、各施設の専攻医や若手専門医による研修発表会も行い、発表内容、スライド資料の良否、発表態度などについて指導的立場の医師や同僚・後輩から質問をうけて討論を行います。
- ・ 各施設において抄読会や勉強会を実施します。リハビリテーションは世界の文化や制度の違いにより大きく異なるので、英文抄読が広い知識を修得するには有用となっています。また、世界的な教科書といわれるリハビリテーションの洋書の輪読会を行い、標準といわれるリハビリテーション医療を修得します。専攻医は最新のガイドラインを参照するとともにインターネットなどによる情報検索を行います。
- ・ 日本リハビリテーション医学会が発行する病態別実践リハビリテーション研修会のDVDなどを用いて症例数の少ない分野においては積極的に学んでください。
- ・ 日本リハビリテーション医学会の学術集会、リハビリテーション地方会などの学術集会、その他各種研修セミナーなどで、下記の事柄を学んで下さい。

各病院内で実施されるこれらの講習会にも参加してください。

- ∞ 標準的医療および今後期待される先進的医療
- ∞ 医療安全、院内感染対策
- ∞ 指導法、評価法などの教育技能

5. 学問的姿勢について

専攻医は、医学・医療の進歩に遅れることなく、常に研鑽、自己学習することが求められます。患者の日常的診療から浮かび上がるクリニカルクエスチョンを日々の学習により解決し、今日のエビデンスでは解決し得ない問題は臨床研究に自ら参加、もしくは企画する事で解決しようとする姿勢を身につけるようにしてください。学会に積極的に参加し、基礎的あるいは臨床的研究成果を発表してください。得られた成果は論文として発表して、公に広めると共に批評を受ける姿勢を身につけてください。

リハビリテーション科専門医資格を受験するためには以下の要件を満たす必要があります。「本医学会における主演者の学会抄録2篇を有すること。2篇のうち1篇は、本医学会地方会における会誌掲載の学会抄録または地方会発行の発表証明書をもってこれに代えることができる。」となっています。

6. 医師に必要なコアコンピテンシー、倫理性、社会性などについて

医師として求められる基本的診療能力（コアコンピテンシー）には態度、倫理性、社会性などが含まれています。内容を具体的に示します。

1) 患者や医療関係者とのコミュニケーション能力を備えること

患者との良好な関係をはぐくむために必要であり、医療関係者とのコミュニケーションもチーム医療のためには必要となります。基本的なコミュニケーション能力は、初期臨床研修で取得されるべき事項ですが、専門研修では患者さんの障害受容などの心理状態への配慮も必要となり、専攻医に必要な技術として、より高度なコミュニケーション能力を身に付ける必要があります。

2) 医師としての責務を自律的に果たし信頼されること（プロフェッショナリズム）

医療専門家である医師と患者を含む社会との契約を十分に理解し、患者、家族から信頼される知識・技能および態度を身につける必要があります。

3) 診療記録の適確な記載ができること

診療行為を適確に記述することは、初期臨床研修で 取得されるべき事項ですが、リハビリテーション科は診療技術に重点が置かれるのと同時にコミュニケーションにも重点が置かれる医療のため、診療記録を的確に記載する必要があります。

4) 患者中心の医療を実践し、医の倫理・医療安全に配慮すること

障害のある患者・認知症のある患者などを対象とすることが多く、倫理的配慮は必要となります。また、医療安全の重要性を理解し事故防止、事故後の対応がマニュアルに沿って実践できる必要があります。

5) 臨床の現場から学ぶ態度を修得すること

臨床の現場から学び続けることの重要性を認識し、その方法を身につけるようにします。

6) チーム医療の一員として行動すること

チーム医療の必要性を理解しチームのリーダーとして活動できることが求められます。他の医療スタッフと協調して診療にあたることができるだけでなく、治療方針を統一し治療の方針を、患者に分かりやすく説明する能力が求められます。また、チームとして逸脱した行動をしないよう、時間遵守などの基本的な行動も要求されます。

7) 後輩医師に教育・指導を行うこと

自らの診療技術、態度が後輩の模範となり、また彼らが形成的指導が実践できるように、学生や初期研修医および後輩専攻医を、指導医とともにチーム医療の一員として、教育・指導することも担ってもらいます。

7. 施設群による研修 PG および地域医療についての考え方

1) 施設群による研修

本研修 PG では埼玉医科大学病院を基幹施設とし、地域の連携施設とともに病院施設群を構成してします。専攻医はこれらの施設群をローテーションすることにより、多彩で偏りのない充実した研修を行うことが可能となります。これは専攻医が専門医取得に必要な経験を積むことに大変有

効です。リハビリテーション医学の専門研修では、領域が8つに分けられていますが、他の診療科にまたがる疾患が多く、さらに障害像も多様です。急性期から回復期、維持期（生活期）を通じて、1つの施設で症

例を経験することは困難です。さらには、行政や地域医療・福祉施設と連携をして、地域で生活する障害者を診ることにより、リハビリテーションの本質も見えてきます。このため、地域の連携病院では多彩な症例を多数経験することで医師としての基本的な力を獲得します。また、医師としての基礎となる課題探索能力や課題解決能力は一つ一つの症例について深く考え、広く論文収集を行い、症例報告や論文としてまとめることで身につけていきます。このことは臨床研究のプロセスに触れることで養われます。このような理由から施設群で研修を行うことが非常に大切です。本研修PGのどの研修病院を選んでも指導内容や経験症例数に不公平が無いよう十分に配慮します。施設群における研修の順序、期間等については、専攻医を中心に考え、個々の専攻医の希望と研修進捗状況、各病院の状況、地域の医療体制を勘案して、本専門研修PG管理委員会が決定します。

1) 地域医療の経験

- ・ 当病院の研修に限らず、連携施設での研修中にも、通所リハビリテーション、訪問リハビリテーションなど介護保険事業、地域リハビリテーション等に関する見学・実習を行い、急性期から回復期、維持期における医療・福祉分野にまたがる地域医療・地域連携を経験できます。
- ・ ケアマネージャーとのカンファレンスの実施、住宅改修のための家屋訪問、脳卒中パスや大腿骨頸部骨折パスでの病診・病病連携会議への出席など、疾病の経過・障害にあわせたリハビリテーションの支援について経験できるようにしてあります。
- ・ 大学拠点型の研修PGですので、医療過疎地区という意味での地域実習は基本的にありませんが、リハビリテーション医療の過疎地区の様子を経験したいという希望には、県の更

生相談所が実施している、地域の巡回相談事業（補装具や福祉相談）に同行できるようスケジュールを調整します。

8. 施設群における専門研修計画について

図 4 に埼玉医科大学病院リハビリテーション科研修 PG の研修コースを示します。

3か月を1クールとして全ての施設で研修します。SR1 では基幹施設を含む埼玉医大病院群で、すべての領域での急性期～回復期リハビリテーションを研修します。SR2 からSR3 前半では、連携施設の回復期リハビリテーション病棟での研修を行います。SR2 の前半では、特に脊髄損傷と神経筋疾患のリハビリテーションを中心に研修し、SR2 後半からSR3 前半では脳卒中を中心とした回復期～維持期でのリハビリテーションを研修します。SR3 後半では、小児のリハビリテーションを研修し、最後に再び埼玉医大病院で仕上げの研修を行います。

図 4 埼玉医科大学病院リハビリテーション科専門研修コース

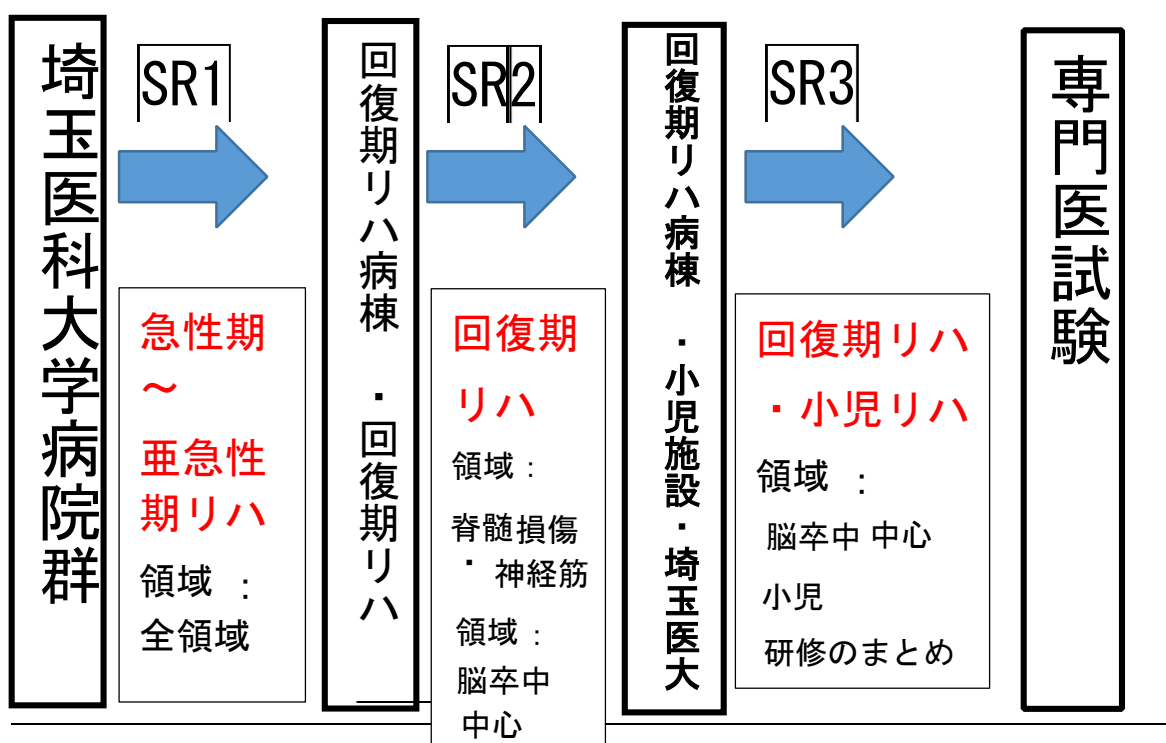


図5～7に上記研修PGコースでの3年間の施設群ローテーションにおける研修内容と予想される経験症例数を例示します。どのコースであっても内容と経験症例数に偏り、不公平がないように十分配慮します。

埼玉医科大学専門研修PGの研修期間は3年間としていますが、修得が不十分な場合は修得できるまでの期間を延長することになります。一方で、subspecialty領域専門医取得を希望される専攻医には必要な教育を開始し、また大学院進学希望者には、臨床研修と平行して研究を開始することを奨めます。

図5. SR1における研修施設の概要と研修カリキュラム

研修レベル (施設名)	研修施設における診療内容の概要	専攻医の研修内容	経験予定症例数	
SR1	指導医数 2名	専攻医数 2名 I(以下の数値は専攻医1名が実際に自ら診療する症例数)	(1)脳血管障害・ (当科入院担当患者のみの症例数)	10 症例
埼玉医科大学 病院リハビリテーション科	病床数 25 床	担当病床数 4 床	外傷性脳損傷など	
	外来数 100 症例/週	担当外来数 2 症例/週	(急性期)	
	特殊外来	特殊外来	(2)脊椎髄疾患・脊髄損傷	5 症例
	装具 20 症例/週	装具 1 症例/週	(3)骨関節疾患・骨折	5 症例
	高次脳機能障害	高次脳機能障害	(4)小児疾患	0 症例
	2 症例/週	1 症例/週	(5)神経筋疾患	1 症例
			(6)切断	1 症例
			(7)内部障害	1 症例
			(8) その他	1 症例
	(1)脳血管障害・ 外傷性脳損傷など	基本的診療能力 (コアコンピテンシー)	電気生理学的診断	1 症例
	(回復期・維持期)	指導医の助言・指導のもと、	言語機能の評価	1 症例
	(2)脊椎髄疾患・脊髄損傷	別記の事項が実践できる	認知症・高次脳機能の評価	10 症例
	(3)骨関節疾患・骨折	基本的知識と技能	摂食・嚥下の評価	2 症例
	(4)小児疾患	知識：運動学、障害学、	排尿の評価	0 症例
	(5)神経筋疾患	ADL/IADL、ICF など	理学療法	24 症例
	(6)切断	技能：全身管理、リハビリ処方、	作業療法	24 症例

	(7)内部障害	装具処方、など	言語聴覚療法	1症例
	(8)その他	上記の評価・検査・治療の概略を	義肢	1症例
		理解し、一部を実践できる	装具・杖・車椅子など	1症例
			訓練・福祉機器	5症例
			摂食嚥下訓練	5症例
			ブロック療法	1症例

図 6. SR2 における研修施設の概要と研修カリキュラム

研修レベル (施設名)	研修施設における診療内容の概要	専攻医の研修内容	経験予定症例数	
SR2	指導医数 1名	専攻医数 1名	(1)脳血管障害・	10 症例
埼玉県総合リハビリテーションセンター	病床数 120 床	担当病床数 24 床/120 床	外傷性脳損傷など	
	外来数 58 症例/週	担当外来数 10 症例/週	(回復期)	
	特殊外来	特殊外来	(2)脊椎脊髄疾患・脊髄損傷	5 症例
	装具 10 症例/週	装具 5 症例/週	(3)骨関節疾患・骨折	5 症例
	ボトックス 3 症例/週	ボトックス 1 症例/週	(4)小児疾患	0 症例
		小児 0 例/週	(5)神経筋疾患	2 症例
		神経筋電図 1 症例/週	(6)切断	1 症例
			(7)内部障害	0 症例
			(8)その他(廃用症候群、がん、疼痛性疾患など)	1 症例
	(1)脳血管障害・	基本的診療能力	電気生理学的診断	2 症例
	外傷性脳損傷など	(コアコンピテンシー)	言語機能の評価	5 症例
	(急性期)	指導医の監視のもと、別記の事項が	認知症・高次脳機能の評価	20 症例
	(2)脊椎脊髄疾患・脊髄損傷	効率的かつ思慮深くできる	摂食・嚥下の評価	5 症例
	(3)骨関節疾患・骨折	基本的知識と技能	排尿の評価	10 症例
		知識：障害受容、社会制度など		
	(5)神経筋疾患	技能：高次脳機能検査、	理学療法	100 症例
	(6)切断	装具処方、ブロック療法、	作業療法	50 症例
	(7)内部障害	急変対応など	言語聴覚療法	30 症例

	(8)その他(廃用症候群、がん、疼痛性疾患など)	指導医の監視のもと、別途カリキュラムでAに分類されている評価・検査・治療の大部分を実践でき、Bに分類されているものの一部について適切に判断し専門診療科と連携できる	義肢 装具・杖・車椅子など 訓練・福祉機器 摂食嚥下訓練 ブロック療法	20 症例 50 症例 30 症例 10 症例 20 症例
--	--------------------------	---	---	---

図 7. SR3 における研修施設の概要と研修カリキュラム

図 7. SR3 における研修施設の概要と研修カリキュラム

研修レベル (施設名)	研修施設における診療内容の概要	専攻医の研修内容	経験予定症例数	
SR3 (若葉病院)	指導医数 1名 病床数 57床(回復期病棟 57床) 外来数 297 症例/週 特殊外来 装具 1 症例/週 痙縮 3 症例/週 嚥下検査 5 症例/週	専攻医数 1 名 担当病床数 24床/57床 担当外来数 10 症例/週 特殊外来 装具 5 症例/週 痙縮 2 症例/週 嚥下検査 2 症例/週	(1)脳血管障害・ 外傷性脳損傷など (急性期)	13 症例
			(2)脊椎脊髄疾患・脊髄損傷	1 症例
			(3)骨関節疾患・骨折	5 症例
			(5)神経筋疾患	1 症例
			(6) 切断	1 症例
			(7) 内部障害	1 症例
			(8) その他	3 症例
	(1)脳血管障害・ 外傷性脳損傷など (急性期)	基本的診療能力 (コアコンピテンシー) 指導医の監視なしでも、	電気生理学的診断 言語機能の評価 認知症・高次脳機能の評価	10 症例 30 症例 30 症例
	(2)脊椎脊髄疾患・脊髄損傷	別記の事項が迅速かつ状況に	摂食・嚥下の評価	80 症例
	(3)骨関節疾患・骨折	応じた対応のできる	排尿の評価	20 症例
	(5)神経筋疾患	基本的知識と技能		
	(6) 切断	知識 社会制度、地域連携など	理学療法	100 症例
	(7) 内部障害	技能：住宅改修提案、	作業療法	50 症例
	(8) その他	ブロック療法、	言語聴覚療法	50 症例
		チームアプローチなど	義肢	0 症例
		指導医の監視なしでも、別途カリ	装具・杖・車椅子など	50 症例
		キュラムでAに分類されている評価・	訓練・福祉機器	30 症例

		検査・治療について中心的な役割を果	摂食嚥下訓練	20 症例
		たし、B に分類されているものを適切に	ブロック療法	20 症例
		判断し専門診療科と連携でき、C に分類		
		されているものの概略を理解し経験し		

9. 専門研修の評価について

専門研修中の専攻医と指導医の相互評価は施設群による研修とともに専門研修 PG の根幹となるものです。

専門研修 SR の 1 年目、2 年目、3 年目のそれぞれに、基本的診療能力（コアコンピテンシー）とリハビリテーション科専門医に求められる知識・技能の修得目標を設定し、その年度の終わりに達成度を評価します。このことにより、基本から応用へ、さらに専門医として独立して実践できるまで着実に実力をつけていくように配慮しています。

- ✓ 指導医は日々の臨床の中で専攻医を指導します。
- ✓ 専攻医は経験症例数・研修目標達成度の自己評価を行います。
- ✓ 指導医も専攻医の研修目標達成度の評価を行います。
- ✓ 医師としての態度についての評価には、自己評価に加えて、指導医による評価、施設の指導責任者による評価、リハビリテーションに関わる各職種から、臨床経験が豊かで専攻医と直接かかわりがあった担当者を選んでの評価が含まれます。
- ✓ 専攻医は毎年 9 月末（中間報告）と 3 月末（年次報告）に「専攻医研修実績記録フォーマット」を用いて経験症例数報告書及び自己評価報告書を作成し、指導医はそれに評価・講評を加えます。
専攻医は上記書類をそれぞれ 9 月末と 3 月末に専門研修 PG 管理委員会に提出します。
- ✓ 指導責任者は「専攻医研修実績記録フォーマット」を印刷し、署名・押印したものを専門研修 PG 管理委員会に送付します。「実地経験目録様式」は、

6ヶ月に1度、専門研修 PG 管理委員会に提出します。自己評価と指導医評価、指導医コメントが書き込まれている必要があります。「専攻医研修実績記録フォーマット」の自己評価と指導医評価、指導医コメント欄は6ヶ月ごとに上書きしていきます。

- ✓ 3年間の総合的な修了判定は研修 PG 統括責任者が行います。この修了判定を得ることができてから専門医試験の申請を行うことができます。

10. 専門研修プログラム管理委員会について

基幹施設である埼玉医科大学病院には、リハビリテーション科専門研修 PG 管理委員会と、統括責任者を置きます。連携施設群には、連携施設担当者と委員会組織が置かれます。埼玉医科大学病院リハビリテーション科専門研修 PG 管理委員会は、統括責任者（委員長）、副委員長、事務局代表者、および連携施設担当委員で構成されます。

専門研修 PG 管理委員会の主な役割は、①研修 PG の作成・修正を行い、②施設内の研修だけでなく、連携施設への出張、臨床場面を離れた学習としての、学術集会や研修セミナーの紹介幹旋、自己学習の機会の提供を行い、③指導医や専攻医の評価が適切か検討し、④研修プログラムの終了判定を行い、修了証を発行する、ことにあります。

基幹施設の役割

基幹施設は連携施設とともに研修施設群を形成します。基幹施設に置かれた PG 統括責任者は、総括的評価を行い、修了判定を行います。また、研修 PG の改善を行います。

連携施設での委員会組織

専門研修連携施設には、専門研修 PG 連携施設担当者と委員会組織を置きます。専門研修連携施設の専攻医が形成的評価と指導を適切に受けているか評価します。専門研修 PG 連携施設担当者は専門研修連携施設内の委員会組織を代表し専門研修基幹施設に設置される専門研修 PG 管理委員会の委員となります。

1 1. 専攻医の就業環境について

専門研修基幹施設および連携施設の責任者は、専攻医の労働環境改善に努めます。専攻医の勤務時間、休日、当直、給与などの勤務条件については、労働基準法を遵守し、各施設の労使協定に従います。さらに、専攻医の心身の健康維持への配慮、当直業務と夜間診療業務の区別とそれぞれに対応した適切な対価を支払うこと、バックアップ体制、適切な休養などについて、勤務開始の時点で説明を行います。研修年次毎に専攻医および指導医は専攻医研修施設に対する評価も行い、その内容は埼玉医科大学病院リハビリテーション科専門研修管理委員会に報告されますが、そこには労働時間、当直回数、給与など、労働条件についての内容が含まれます。

1 2. 専門研修 PG の改善方法

埼玉医科大学病院リハビリテーション科研修 PG では、より良い研修 PG にするべく、専攻医からのフィードバックを重視して研修 PG の改善を行うこととしています。

1) 専攻医による指導医および研修 PG に対する評価

専攻医は、年次毎に指導医、専攻医研修施設、専門研修 PG に対する評価を行います。また、指導医も専攻医研修施設、専門研修 PG に対する評価を行います。専攻医や指導医等からの評価は、質問紙にて行い、研修 PG 管理委員会に提出され、研修 PG 管理委員会は研修 PG の改善に役立っています。このようなフィードバックによって専門研修 PG をより良いものに改善していきます。

専門研修 PG 管理委員会は改善が必要と判断した場合、専攻医研修施設の実地調査および指導を行います。評価にもとづいて何をどのように改善したかを記録し、毎年3月31日までに日本専門医機構のリハビリテーション領域研修委員会に報告します。

2) 研修にたいする監査（サイトビジット等）・調査への対応

専門研修 PG に対して日本専門医機構からサイトビジット（現地調査）が行われます。その評価にもとづいて専門研修 PG 管理委員会で研修 PG の改良を行います。専門研修 PG 更新の

際には、サイトビジットによる評価の結果と改良の方策について日本専門医機構のリハビリテーション領域研修委員会に報告します。

1 3. 修了判定について

3年間の研修機関における年次毎の評価表および3年間のプログラム達成状況にもとづいて、知識・技能・態度が専門医試験を受けるのにふさわしいものであるかどうか、症例経験数が日本専門医機構のリハビリテーション科領域研修委員会が要求する内容を満たしているものであるかどうか、研修出席日数が足りているかどうかを、専門医認定申請年(3年目あるいはそれ以後)の3月末に研修 PG 統括責任者または研修連携施設担当者が研修 PG 管理委員会において評価し、研修 PG 統括責任者が修了の判定をします。

1 4. 専攻医が専門研修 PG の修了に向けて行うべきこと

修了判定のプロセス

専攻医は「専門研修 PG 修了判定申請書」を専門医認定申請年の4月末までに専門研修 PG 管理委員会に送付してください。専門研修 PG 管理委員会は5月末までに修了判定を行い、研修証明書を専攻医に送付します。専攻医は日本専門医機構のリハビリテーション科専門研修委員会に専門医認定試験受験の申請を行ってください。

1 5. 研修 PG の施設群について

専門研修基幹施設

埼玉医科大学病院リハビリテーション科が専門研修基幹施設となります。本 PG での連携施設では、リハビリテーション科専門研修指導責任者と同指導医(指導責任者と兼務可能)が常勤しており、リハビリテーション研修委員会の認定を受け、リハビリテーション科を院内外に標榜しています。

埼玉医科大学病リハビリテーション科研修 PG の施設群を構成する連携施設は、以下の通りです。連携施設は診療実績基準を満たしており、研修の際には雇用契約を結びます。

連携施設

- ・ 埼玉医科大学国際医療センターリハビリテーション科（専用病床なし）
- ・ 埼玉医科大学総合医療センターリハビリテーション科（専用病床なし）
- ・ 希望病院リハビリテーション科（回復期病棟）
- ・ 天草病院リハビリテーション科（回復期病棟）
- ・ 埼玉県総合リハビリテーションセンター（回復期病棟）
- ・ 独立行政法人東埼玉病院（回復期病棟）
- ・ 光の家療育センター
- ・ 若葉病院リハビリテーション科（回復期病棟）
- ・ 表 1 プログラムローテーション例

1年目 通年	2年目通年	3年目 通年
埼玉医科大学病院リハビリテーション科	埼玉県総合リハセンター または東埼玉病院	回復期リハ病棟（若葉病院） または光の家療育センター
埼玉医科大学病院リハビリテーション科	埼玉県総合リハセンター または東埼玉病院	回復期リハ病棟（若葉病院） または光の家療育センター
埼玉医大国際医療センター または総合医療センター	回復期リハ病棟 （希望病院または天草病院）	埼玉医科大学病院リハビリテーション科
埼玉医大国際医療センター または総合医療センター	回復期リハ病棟 （希望病院または天草病院）	埼玉医科大学病院リハビリテーション科

専門研修施設群

埼玉医科大学病院リハビリテーション科と連携施設により専門研修施設群を形成します。

埼玉医科大学リハビリテーション科研修 PG の専門研修施設群は埼玉県の西部と東部にあります。埼玉医科大学病院群/光の家療育センター /若葉病院リハビリテーション科は西部地区にあります。また、希望病院リハビリテーション科/天草病院リハビリテーション科/埼玉県総合リハビリテーションセンター/独立行政法人東埼玉病院（回復期病棟）は東部地区にあります。西部地区と東部地区の中継地点として川越市があります。川越市に居を構えれば、小江戸の風情を楽しみつつ、研修施設のいづれにも公共交通機関または自家用車を用いて十分に通勤可能です。

16. 専攻医受入数について

毎年2名を受入数とします。

各専攻医指導施設における専攻医総数の上限（3学年分）は、当該年度の指導医数×2と日

本リハビリテーション医学会専門医制度で決められています。埼玉医科大学病院リハビリテーション科研修 PG における専攻医受け入れ可能人数は、専門研修基幹施設および連携施設の受け入れ可能人数を合算したものです。当院に2名、プログラム全体では13名の指導医が在籍しており、専攻医に対する各施設での指導医数は、十分に余裕があり、専攻医の希望によるローテーションのばらつき（連携病院の偏り）に対しても充分対応できるだけの指導医数を有するといえます。また、受入専攻医数は病院群の症例数は、専攻医に必要とされる経験数に対しても十分に提供できるものとなっています。

17. Subspecialty 領域との連続性について

リハビリテーション科専門医を取得した医師は、リハビリテーション科専攻医としての研修期間以後に Subspecialty 領域の専門医のいずれかを取得できる可能性があります。リハビリテーション領域において Subspecialty 領域である小児神経専門医、感染症専門医など（他は未確定）との連続性をもたせるため、経験症例等の取扱いは検討中です。

18. 研修カリキュラム制による研修について

研修カリキュラム制による研修を選択できる条件は、内科（現行制度での認定内科医も認める）、外科、脳神経外科、小児科、整形外科の5学会に対して承認を求める予定です。これらの基本領域学会の専門医（内科学会においては現行制度での認定内科医を含める）を有するものとなっています。リハビリテーション科専攻医としての研修期間を2年以上とすることができます。

研修カリキュラム制において免除されるカリキュラム内容に関しては、基本領域と調整を行います。またリハビリテーション科専攻医となる以前に、リハビリテーション科専門研修プログラム整備指針で定める基幹施設の条件の1つである「初期臨床研修の基幹型臨床研修病院、医師を養成する大学病院、または医師を養成する大学病院と同等の研究・教育環境を提供できると認められる施設」に6ヶ月以上勤務した経験がある場合は、その期間をリハビリテーション科専門研修プログラムにおける基幹施設の最短勤務期間である6ヶ月に充てることで、基幹施設以外の連携施設の勤務のみで研修を終了することができます。

埼玉医科大学リハビリテーション科PCの研修も受けられるように個別に対応・調整します。

19. リハビリテーション科研修の休止・中断、PG移動、PG外研修の条件、大学院研修について

- 1) 出産・育児・疾病・介護・留学等にあつては研修プログラムの休止・中断期間を除く通算3年間で研修カリキュラムの達成レベルを満たせるように、柔軟な専門研修プログラムの対応を行います。
- 2) 短時間雇用の形体での研修でも通算3年間で達成レベルを満たせるように、柔軟な専門研修プログラムの対応を行います。
- 3) 住所変更等により選択している研修プログラムでの研修が困難となった場合には、転居先で選択できる専門研修プログラムの統括プログラム責任者と協議した上で、プログラムの移動には日本専門医機構内のリハビリテーション科研修委員会への相談等が必要ですが、対応を検討します。

- 4) 他の研修プログラムにおいて内地留学的に一定期間研修を行うことは、特別な場合を除いて認められません。特別な場合とは、特定の研修分野を受け持つ連携施設の指導医が何らかの理由により指導を行えない場合、臨床研究を専門研修と併せて行うために必要な施設が研修施設群にない場合、あるいは、統括プログラム責任者が特別に認める場合となっています。
- 5) 留学、臨床業務のない大学院の期間に関しては研修期間として取り扱うことはできませんが、社会人大学院や臨床医学研究系大学院に在籍し、臨床に従事しながら研究を行う期間については、そのまま研修期間に含めることができます。
- 6) 専門研修 PG 期間のうち、出産・育児・疾病・介護・留学等でのプログラムの休止は、全研修機関の3年のうち6ヵ月までの休止・中断では、残りの期間での研修要件を満たしていれば研修期間を延長せずにプログラム修了と認定するが、6ヵ月を超える場合には研修期間を延長します。

20. 専門研修指導医 について

リハビリテーション科専門研修指導医は、下記の基準を満たし、日本リハビリテーション医学会ないし日本専門医機構のリハビリテーション科領域専門研修委員会により認められた資格です。

- ・ 専門医取得後、3年以上のリハビリテーションに関する診療・教育・研究に従事していること。但し、通常5年で行われる専門医の更新に必要な条件（リハビリテーション科専門医更新基準に記載されている、①勤務実態の証明、②診療実績の証明、③講習受講、④学術業績・診療以外の活動実績）を全て満たした上で、さらに以下の要件を満たす必要がある。
- ・ リハビリテーションに関する筆頭著者である論文1篇以上を有すること。
- ・ 専門医取得後、本医学会学術集会（年次学術集会、専門医会学術集会、地方会学術集会のいずれか）で2回以上発表し、そのうち1回以上は主演者であること。

- ・ 日本リハビリテーション医学会が認める指導医講習会を1回以上受講していること。

指導医は、専攻医の教育の中心的役割を果たすとともに、指導した専攻医を評価することとなります。また、指導医は指導した研修医から、指導法や態度について評価を受けます。

指導医のフィードバック法の学習 (FD)

指導医は、指導法を修得するために、日本リハビリテーション医学会が主催する指導医講習会を受講する必要があります。ここでは、指導医の役割・指導内容・フィードバックの方法についての講習を受けます。指導医講習会の受講は、指導医認定や更新のために必須です。

2 1. 専門研修実績記録システム、マニュアル等について

研修実績および評価の記録

日本リハビリテーション医学会ホームページよりダウンロードできる「専攻医研修実績記録」に研修実績を記載し、指導医による形成的評価、フィードバックを受けます。総括的評価は研修カリキュラムに則り、少なくとも年1回行います。

埼玉医科大学病院リハビリテーション科にて、専攻医の研修履歴（研修施設、期間、担当した専門研修指導医）、研修実績、研修評価を保管します。さらに専攻医による専門研修施設および専門研修PGに対する評価も保管します。

研修PGの運用には、以下のマニュアル類やフォーマットを用います。これらは日本リハビリテーション医学会ホームページよりダウンロードすることができます。

- ◎専攻医研修マニュアル
- ◎指導者マニュアル
- ◎専攻医研修実績記録フォーマット

「専攻医研修実績記録フォーマット」に研修実績を記録し、一定の経験を積むごとに専攻医自身が達成度評価を行い記録してください。少なくとも1年に1回は達成度評価により、学

問的姿勢、総論（知識・技能）、各論（8 領域）の各分野の形成的自己評価を行ってください。各年度末には総括的評価により評価が行われます。

◎指導医による指導とフィードバックの記録

専攻医自身が自分の達成度評価を行い、指導医も形成的評価を行って記録します。

少なくとも1年に1回は学問的姿勢、総論（知識・技能）、各論（8 領域）の各分野の形成的評価を行います。評価者は1：さらに努力を要する の評価を付けた項目については必ず改善のためのフィードバックを行い記録し、翌年度の研修に役立たせます。

2 2. 研修に対するサイトビジット（訪問調査）について

専門研修 PG の施設に対して日本専門医機構からのサイトビジットがあります。サイトビジットにおいては研修指導体制や研修内容について調査が行われます。その評価は専門研修 PG 管理委員会に伝えられ、PG の必要な改良を行います。

2 3. 専攻医の採用と修了について

採用方法

埼玉医科大学病院リハビリテーション科専門研修 PG 管理委員会は、毎年7月から病院ホームページでの広報や研修説明会等を行い、リハビリテーション科専攻医を募集します。PG への応募者は、定められた締め切りまでに研修 PG 責任者宛に所定の形式の『埼玉医科大学病院リハビリテーション科専門研修 PG 応募申請書』および履歴書、医師免許証の写し、保険医登録証の写し、を提出してください。

申請書は

(1) 埼玉医科大学病院リハビリテーション科の website

(<http://www.saitama-med.ac.jp/hospital/division/53rehabilitation/index.html>) よりダウンロード

(2) 電話で問い合わせ (049-276-1255)

(3) email わせ (majima@saitama-med.ac.jp)

原則として11月中に書類選考および面接を行います。採否については、12月に決定して本人に文書で通知します。

修了について

13. 修了判定について を参照ください。